

成人看護学でのシナリオシミュレーション演習における学生の学習経験 ～講義と実習をつなぐ看護過程演習の取り組み～

片穂野邦子¹⁾・高比良祥子¹⁾・吉田恵理子¹⁾・松本幸子²⁾

The Learning Experiences of Students through the Scenario-based Simulation
Exercise in Adult Nursing Education
: Effort of the Nursing Process Exercise which Connects
the Lecture and Practicum

Kuniko KATAHONO¹, Sachiko TAKAHIRA¹,
Eriko YOSHIDA¹, Sachiko MATSUMOTO²

要 約

本研究の目的は、成人看護学の看護過程事例を用いたシナリオシミュレーション演習における学生の学習経験を明らかにし、教授方法への示唆を得ることである。シナリオシミュレーション演習実施後の看護学科3年次生15名に半構造化面接を行い、質的帰納的に分析した。結果、9つのカテゴリが形成された。学生は、紙面事例を患者シミュレータで観察することで、【看護過程事例と患者シミュレータがつながる現実感】や【看護過程展開とシミュレーションでの観察項目のつながり】を捉え、【観察に基づいたアセスメントの重要性】【観察の根拠となる知識・技術の必要性】【変化を予測した観察や対処への備えの必要性】を実感し、訪室前の情報と観察した情報からアセスメントする重要性や確かな実践力の必要性の理解に至っていた。また、【医療者の言動が患者の気持ちに影響を与えることへの理解】という患者に配慮した対応の必要性、さらに、【グループでの発見や改善点の気づき】などの情報共有や連携の必要性を学習経験として見出していた。看護過程事例を用いたシナリオシミュレーション演習は、学生の臨地実習の前段階として有用な学習方法であることが示唆された。

キーワード：看護学生、成人看護学、シナリオシミュレーション演習、看護過程、学習経験

所 属：

1) 長崎県立大学シーボルト校看護栄養学部看護学科

2) 長崎県立大学 名誉教授

1) Department of Nursing Science, Faculty of Nursing and Nutrition, University of Nagasaki, Siebold

2) University of Nagasaki, emeritus professor

緒言

医療分野における患者シミュレータを活用したシミュレーション教育は、患者の権利と安全の確保の観点から学生が臨床実習で侵襲を伴う看護行為を体験することが難しくなっているという現状において、実際の患者にリスクを与えることなく学ぶ手段として、医学教育および看護学教育の中で重要な要素となってきた。また、チームパフォーマンスの向上に大きく寄与する教育方法という認識が広まってきている。看護教育において、厚生労働省から公表された「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書(2007)」¹⁾では、看護実践能力の取得に向けた臨床を想定した演習の強化や、「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書(2011)」²⁾では、侵襲を伴う行為を習得するためのシミュレータの活用や状況設定した演習の充実の必要性が求められている。

シミュレーション教育の長所は、学習者・患者を危険にさらさない、失敗が教材になる、やり直し・中断が可能、何度も繰り返し練習できる、学習時間が自由に設定できる、目標に合わせた症例や状況を設定できる、記録による振り返りができる、ノンテクニカルスキル(状況認識、意思決定、コミュニケーション、チームワーク、リーダーシップ、個人の限界の管理)を強化できる等があげられる。一方で、シミュレータやその管理にコストがかかる、学習場所の確保に限界がある、学習の準備に時間とマンパワーがかかる、シミュレーション教育に精通した指導者が少ない、学習者の人数に制限がある、アウトカムの評価方法が確立されていない、という課題も多く認められる^{3) 4)}。

看護教育においてコンピュータシステムに対応した、患者シミュレータHuman Patient Simulator(HPS)を活用したシミュレーション教育が注目されている。患者シミュレータを用いた先行研究では、臨床場面を想定したシミュレーション演習の成果に関する報告^{6) 9)}がされている。シミュレーション教育は再現可能かつリアリティに近い学習状況を創り出すため、看護基礎教育においても患者にかかわる以前の段階的かつ実践的学習を促進する教育方法として期待されている^{4) 5)}。

A大学看護学科の成人看護学では2011年から看護過程演習に患者シミュレータを用いたシナリオシミュレーション演習を取り入れて実施している。本研究では、看護学科3年次生を対象に、科目「成人看護学Ⅱ」の看護過程事例を用いたシナリオシミュレーション演習における学生の学習経験を明らかにし、講義と実習をつなぐ教授方法への示唆を得ることを目的とした。

用語の定義

学習経験：看護学生が患者シミュレータを用いたシナリオシミュレーション演習を通して、実際に見たり聞いたり触れたりすることにより獲得した看護に関する知識・技術・態度に関する学生に意識化された内容。

研究方法

1.研究デザイン

半構造化面接法を用いた帰納的な質的記述的研究デザイン。

2.対象者

A大学看護学科3年次生15名で、調査の同意が得られた者。

3.データ収集期間

2013年6月

4.演習の展開方法

シナリオシミュレーション演習は、紙上事例の看護過程展開後に実施した。「成人看護学Ⅱ」における看護過程演習の構成、シナリオシミュレーション演習の目標・事前学習内容・演習内容を図1・2、演習の進め方を図3に示す。

演習は、3年次看護学生63名を7グループに分け、教員はファシリテータとして各ブースをそれぞれ担当し、学生は各ブースでペアでの実施者その他のメンバーは観察者の役割を持ち、ペアで順番に実施をした。実施中、教員は学生の言動に対し患者シミュレータの声として反応した。教員間でシナリオシミュレーション演習中とデブリーフィングの進め方を共有した。実施前に各ブースで状況設定・学習目標・使用物品を確認し、ペアでのプレブリーフィングでは観察内容・流れなどの打ち合

- 開講時期・対象：3年次前期、看護大学生63名
- 看護過程演習の構成：
講義・演習科目「成人看護学Ⅱ」全23回のうち看護過程演習6回

コマ	看護過程演習のスケジュール
第1回	看護過程事例提示
	看護過程個人作業・資料提出（1回）
第7回	看護過程グループ作業
	看護過程グループ資料提出（2回）
第14・15回	看護過程発表会
	シナリオシミュレーションのオリエンテーション
第16・17回	シナリオシミュレーション演習

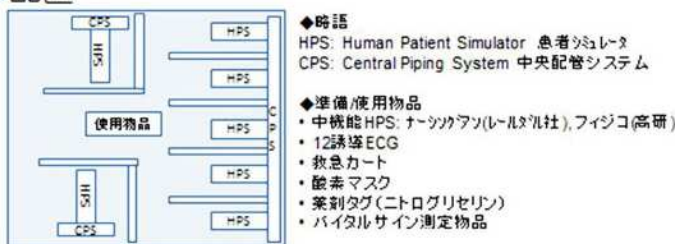
図1 「成人看護学Ⅱ」における看護過程演習の構成

- 学習目標
 - ・事例の看護問題を踏まえた必要な観察を実施できる
 - ・観察結果から事例の状態をアセスメントし問題が認識できる
 - ・患者に必要な処置や看護援助を実施できる
 - ・患者に声かけや説明ができる
 - ・ペアと連携して実施できる
- 事前学習
 - ・事例の看護過程で展開した看護問題、看護計画の確認
 - ・シミュレーター(ナースing・アソ、フィジコ)でのフィジカルアセスメント
- 演習内容
 - 事例: 54才、男性、労作性狭心症
 - 場面: PCI治療後1日目の訪室
 - 指示: 胸部不快の訴え、心電図モニター上でST変化がある場合
12誘導心電図検査→ニトログリセリン舌下→12誘導心電図検査

図2 シナリオシミュレーション演習の学習目標・事前学習・演習内容

学生は7ブースに分かれ、2人1組の5ペアで順番に実施し、1ペアが終わるごとにデブリーフィングを行った。シナリオは1事例で、ペア1からペア5まで繰り返す中で状態を変化させた。

○配置



○タイムスケジュール (25分×5ペア)



図3 シミュレーション演習の進め方

わせを行い、実施直後にデブリーフィングを行った。デブリーフィングでは、学習目標を掲示し、教員がデブリーファラーとして、①何がおこっていたのか、②できたこと・できなかったこと、それは何故か、③どうすればよいか（改善策）、を発問した。最後に全体集まり、各ブースでの体験を発表し学びを共有した。HPSは、基礎・成人看護学で管理している患者のFidelity（忠実度）が中程度である中機能シミュレータのフィジコ（京都科学）4体、ナーシング・アン（レールダル社）3体を使用した。

5.データ収集方法

看護過程演習の事例を用いたシナリオシミュレーション演習後に半構造化面接を実施した。インタビューガイドに基づいて、「シナリオシミュレーション演習を実施して一番印象に残ったこと」、「演習を通してどのような学びがあったか」、「この演習が今後どのように役立つと思うか」などの質問を行った。面接は同日に行い、同意を得た学生15名程度に1人につき30分程度実施した。インタビューはプライバシーの保護のため個室で行い、同意を得た上でICレコーダーに録音した。

6.分析方法

学生へのインタビューの逐語録から、看護過程演習におけるシナリオシミュレーション演習での学習経験の内容を分析した。分析は、逐語録を丁寧に何度も読み、シナリオシミュレーション演習における学習経験に焦点を当て、最小単位で抽出した内容をコード化し、類似性・差異性を検討したものをサブカテゴリ化し、さらに抽象度を上げカテゴリを形成した。分析過程では、共同研究者間で確認を重ねて信用性を確保した。

7.倫理的配慮

学生には、文書と口頭で説明をし、研究参加および研究報告等による結果の開示の同意を得た。その際、研究への参加の有無が、成績評価に関与しないことを強調した説明を行った。インタビューの音声と逐語録のデータは匿名化し、個人が特定されないように処理を行い、データは教員の研究室で厳重に保管した。結果の報告の際には、個人が特定されるような情報は開示しないことを説明した。本研究は、長崎県立大学一般研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号第197号）。

結果

対象は、A大学看護学科3年次生15名であった。シナリオシミュレーション演習後の学生の語りから、334の分析単位、110のコードが抽出され、38のサブカテゴリ、9のカテゴリが形成された（表1）。以下、カテゴリを【 】, サブカテゴリを〈 〉で示す。

学生は、【看護過程事例と患者シミュレータがつながる現実感】、【看護過程展開とシミュレーションでの観察項目のつながり】、【観察に基づいたアセスメントの重要性】、【観察の根拠となる知識・技術の必要性】、【変化を予測した観察や対処への備えの必要性】、【ペアとの情報共有と連携の重要性】、【グループでの発見や改善点の気づき】、【時間・手技・指示にとらわれない患者やペアへの配慮の必要性】、【医療者の言動が患者の気持ちに影響を与えることへの理解】という学習経験をしていることが明らかとなった。

1【看護過程事例と患者シミュレータがつながる現実感】

このカテゴリは、〈患者シミュレータの観察は実際の患者を想起し緊張や責任を感じる〉〈患者シミュレータで観察したことは患者の全体像の理解につながり実習がイメージできる〉〈実際の患者をイメージすることができ学習意欲が高まる〉〈不整脈触知の体験や、基礎で学んだ技術を実践することで異常時の対応のイメージができる〉〈看護過程展開後に事例をイメージした学習や手技の練習を行うことで観察や対応ができる〉〈患者シミュレータの反応から訴えや観察の情報が得られるため、安心感を与える声掛けやねぎらいの声掛けが自然にできる〉のサブカテゴリで構成された。

2【看護過程展開とシミュレーションでの観察項目のつながり】

このカテゴリは、〈看護計画は誰もが理解でき共有することの大切さがわかり実習に活かせる〉〈看護過程で抽出した看護問題と観察項目がシミュレーションで一致する〉〈個別性のある看護問題の抽出には、病態や検査、患者の情報の理解が必要である〉〈看護過程の演習とシミュレーションの実践は実習に役立つ〉のサブカテゴリで

成人看護学でのシナリオシミュレーション演習における学生の学習経験
～講義と実習をつなぐ看護過程演習の取り組み～

表1 シナリオシミュレーション演習における学生の学習経験

カテゴリ	サブカテゴリ
看護過程事例と患者シミュレータがつながる現実感	患者シミュレータの観察は実際の患者を想起し緊張や責任を感じる
	患者シミュレータで観察したことは患者の全体像の理解につながり実習がイメージできる
	実際の患者をイメージすることができ学習意欲が高まる
	不整脈触知の体験や、基礎で学んだ技術を実践することで異常時の対応のイメージができる
	看護過程展開後に事例をイメージした学習や手技の練習を行うことで観察や対応ができる
	患者シミュレータの反応から訴えや観察の情報が得られるため、安心感を与える声掛けやねぎらいの声掛けが自然にできる
看護過程展開とシミュレーションでの観察項目のつながり	看護計画は誰もが理解でき共有することの大切さがわかり実習に活かせる
	看護過程で抽出した看護問題と観察項目がシミュレーションで一致する
	個別性のある看護問題の抽出には、病態や検査、患者の情報の理解が必要である
	看護過程の演習とシミュレーションの実践は実習に役立つ
観察に基づいたアセスメントの重要性	情報収集、看護計画、実施まで個別性を考えた一連の流れを関連付けた演習は実習に役立つ
	観察した情報から原因をアセスメントし、対処する重要性を理解する
	看護過程の一連の流れの大事さを理解する
観察の根拠となる知識・技術の必要性	根拠に基づいた患者の全体像の理解不足や自分の課題を自覚する
	既習の内容の確認や技術練習の必要性を実感する
	病態や合併症の危険性を理解していなければ異常時の対応はできない
	観察の根拠となる疾患や病態の理解が必要である
	段取りができていないと、時間内に異常時の対応・観察ができない
観察項目の不足や技術の未熟さを実感する	
変化を予測した観察や対処への備えの必要性	患者に起こり得ることを予測した観察項目の根拠を理解していなければ急変時の対応はできない
	状態が変化していく予想外の患者への対応は難しい
	異常時の観察・対応の準備をしておくことで必要な実践ができる
ペアとの情報共有と連携の重要性	ペアで観察の流れや役割分担、異常時の対応について情報共有することで、効率的な観察ができる
	ペアで事前に打ち合わせしても、相手の動きや情報を共有しながら観察することの重要性を学ぶ
	異常時の対応におけるペアと連携した実践の必要性を理解する
グループでの発見や改善点の気づき	デブリーフィングで、手技の不確かさや疑問、観察の情報源やアセスメント、対処方法を理解する
	他のペアの実施やデブリーフィングを活かして関連付けた観察ができる
	ペアでの実施とグループでの意見交換の繰り返しにより、改善点が見つかり個別性のある観察を理解する
	グループで意見交換をすることで改善点や疑問の解決につながり、実習での看護計画の共有に役立つ
実践やデブリーフィングでの情報共有は、学習に興味湧き楽しい	
時間・手技・指示にとらわれない患者やペアへの配慮の必要性	自分の手技を時間内に終わることを重視し、必要な観察や説明ができていないことがわかる
	自分のすることに一生懸命で、患者やペアへの配慮不足に気づく
	患者の立場に立った声掛けや、実施する技術という意識の不足に気づかされる
	情報収集を優先し一方的なコミュニケーションとなっていることに気づく
	症状出現時の指示の実施に気を取られ、患者に根拠や不安を考慮した説明ができていないことがわかる
症状出現時、医師の指示内容に気を取られ、必要な観察やアセスメントができていないとわかる	
医療者の言動が患者の気持ちに影響を与えることの理解	患者シミュレータの発言から医療者の説明や行為が患者に恐怖や不安を与えることを理解する
	優先順位を考えた観察と異常時の落ち着いた対応が、患者の不安を軽減できる

構成された。

3【観察に基づいたアセスメントの重要性】

このカテゴリは、〈情報収集、看護計画、実施まで個別性を考えた一連の流れを関連付けた演習は実習に役立つ〉〈観察した情報から原因をアセスメントし、対処する重要性を理解する〉〈看護過程の一連の流れの大事さを理解する〉のサブカテゴリで構成された。

4【観察の根拠となる知識・技術の必要性】

このカテゴリは、〈根拠に基づいた患者の全体像の理解不足や自分の課題を自覚する〉〈既習の内容の確認や技術練習の必要性を実感する〉〈病態や合併症の危険性を理解していなければ異常時の対応はできない〉〈観察の根拠となる疾患や病態の理解が必要である〉〈段取りができていないと、時間内に異常時の対応・観察ができない〉〈観察項目の不足や技術の未熟さを実感する〉のサブカテゴリで構成された。

5【変化を予測した観察や対処への備えの必要性】

このカテゴリは、〈患者に起こり得ることを予測した観察項目の根拠を理解していなければ急変時の対応はできない〉〈状態が変化していく予想外の患者への対応は難しい〉〈異常時の観察・対応の準備をしておくことで必要な実践ができる〉のサブカテゴリで構成された。

6【ペアとの情報共有と連携の重要性】

このカテゴリは、〈ペアで観察の流れや役割分担、異常時の対応について情報共有することで、効率的な観察ができる〉〈ペアで事前に打ち合わせしても、相手の動きや情報を共有しながら観察することの重要性を学ぶ〉〈異常時の対応におけるペアと連携した実践の必要性を理解する〉のサブカテゴリで構成された。

7【グループでの発見や改善点の気づき】

このカテゴリは、〈デブリーフィングで、手技の不確かさや疑問、観察の情報源やアセスメント、対処方法を理解する〉〈他のペアの実施やデブリーフィングを活かして関連付けた観察ができる〉〈ペアでの実施とグループでの意見交換の繰り返しにより、改善点が見つかり個別性のある観察を理解する〉〈グループで意見交換をすることで改善点や疑問の解決につながり、実習での看護計画の共有に役立つ〉〈実践やデブリーフィング

での情報共有は、学習に興味湧き楽しい〉のサブカテゴリで構成された。

8【時間・手技・指示にとらわれない患者やペアへの配慮の必要性】

このカテゴリは、〈自分の手技を時間内に終わることを重視し、必要な観察や説明ができていないことがわかる〉〈自分のすることに一生懸命で、患者やペアへの配慮不足に気づく〉〈患者の立場に立った声掛けや、実施する技術という意識の不足に気づかされる〉〈情報収集を優先し一方的なコミュニケーションとなっていることに気づく〉〈症状出現時の指示の実施に気を取られ、患者に根拠や不安を考慮した説明ができていないことがわかる〉〈症状出現時、医師の指示内容に気を取られ、必要な観察やアセスメントができていないとわかる〉のサブカテゴリで構成された。

9【医療者の言動が患者の気持ちに影響を与えることへの理解】

このカテゴリは、〈患者シミュレータの発言から医療者の説明や行為が患者に恐怖や不安を与えることを理解する〉〈優先順位を考えた観察と異常時の落ち着いた対応が、患者の不安を軽減できる〉のサブカテゴリで構成された。

考察

1.看護過程演習での患者シミュレータを用いたシナリオシミュレーション演習における看護学生の学習経験の特徴

A大学看護学科の成人看護学では、看護過程演習における患者理解を促進する学習支援方法として、リアリティのある学習環境を創り出すために、コンピュータで生体反応を設定できる患者シミュレータ(HPS)を用いたシナリオシミュレーション演習を組み入れている。

シナリオシミュレーション演習後の学生の学習経験として、【看護過程事例と患者シミュレータがつながる現実感】、【看護過程展開とシミュレーションでの観察項目のつながり】、【観察に基づいたアセスメントの重要性】が導き出された。学生は看護過程で展開した紙上事例を患者シミュレータで観察することで、患者の視覚的イメージ化が促進され、緊張感を持ち、自分が観察を実施する

という責任を自覚し、さらに、現実的な体験から学習意欲の高まりにもつながっていたと推察する。また、患者シミュレータの全身観察と反応から、看護過程展開で立案した看護計画と実際の観察項目とのつながりを捉え、訪室前の情報と観察した情報を用いたアセスメントの重要性の理解に至ったと考える。

また、学生は【観察の根拠となる知識・技術の必要性】、【変化を予測した観察や対処への備えの必要性】という学習経験をしていた。学生は観察の根拠となる知識・技術の未熟さや、バイタルサインや訴えが変化する患者シミュレータの観察を経験して状態変化の予測とその対応への準備の不十分さを実感したことで、単に観察項目を実施するのではなく、根拠に基づく確かな実践力の必要性の理解に至ったと考える。

さらに、学生は【時間・手技・指示にとらわれない患者やペアへの配慮の必要性】、【医療者の言動が患者の気持ちに影響を与えることの理解】という学習経験をしていた。阿部¹⁰⁾は、医療におけるシミュレーション教育では、医療者としての必要なテクニカルだけでなく、状況認識やコミュニケーション、チームワークなどのノンテクニカルな能力の向上を目指すものであると述べている。学生は、制限時間や手技、異常時の指示を優先し、患者に対する説明の不足や一方的なコミュニケーションになっていたことや、自分の実践に集中してペアの学生の動きに配慮ができていなかったこと、そして、自分の言動に対する反応から患者に不安を与えることなどを気づいており、これらをシナリオシミュレーション演習で得られる学びとして見出していた。

演習ではグループ内でペアを組んで患者シミュレータを観察し、デブリーフィングを繰り返し実施している。その経験から、学生は【ペアとの情報共有と連携の重要性】、【グループでの発見や改善点の気づき】という学習経験をしていた。ペアでの実施では、役割分担と情報共有により効率よく観察ができること、一方で、役割や流れを事前に決めていても患者の状態やお互いの動きを見て連携して情報交換をすることが、観察するうえで重要であることも見出していた。また、学生は実施とデブリーフィングの繰り返しを通して、知

識・手技、情報の関連づけの疑問や自己の課題、改善策を導き出すことを、シナリオシミュレーション演習とデブリーフィングで得られる学びとして捉えていた。

医療者教育におけるシミュレーション教育について阿部¹¹⁾は、「臨床の事象を、学習要素に焦点化して再現した状況のなかで、学習者が人やものにかかわりながら医療行為やケアを経験し、その経験を学習者が振り返り、検証することによって、専門的な知識・技術・態度の統合を図ることをめざす教育（学習）」と定義している。本研究で明らかとなった学習経験から、学生は知識・技術・態度を統合する学びを得られていたと考える。

2.講義と実習をつなぐ看護過程演習におけるシナリオシミュレーション演習の教授方法への示唆

シミュレーション教育は学習者が能動的に学ぶアクティブラーニングで、看護学生の臨床実習での学習環境の変化による実践の機会の制限や、シミュレーション教育の利点から、看護基礎教育において普及が進んできている¹²⁾。

学生は〈患者シミュレータで観察したことは患者の全体像の理解につながり実習がイメージできる〉や〈情報収集、看護計画、実施まで個別性を考えた一連の流れを関連付けた演習は実習に役立つ〉など、看護過程事例と患者シミュレータを組み合わせたシナリオシミュレーション演習を実習につながる学びとしていた。さらに、デブリーフィングでの振り返りと改善策について話し合う過程を通して、〈グループで意見交換をすることで改善点や疑問の解決につながり、実習での看護計画の共有に役立つ〉ことを見出していた。

また、学生の【観察の根拠となる知識・技術の必要性】という学習体験は、〈根拠に基づいた患者の全体像の理解不足や自分の課題を自覚する〉、〈病態や合併症の危険性を理解していなければ異常時の対応はできない〉、〈観察項目の不足や技術の未熟さを実感する〉などの知識・技術不足の自覚から導かれていた。この学習を促進する工夫として、実習前の夏期休暇中の自主練習の支援や実習前技術チェックテストなどを組み入れていくことが示唆された。一方で、〈実際の患者をイメージすることができ学習意欲が高まる〉ことや【グループでの発見や改善点の気づき】では〈実践やデブ

リーフィングでの情報共有は、学習に興味湧き楽しい」という学習経験を見出していた。これらは学習の動機づけになるため、「成人看護学Ⅱ」の科目構成ではシナリオシミュレーション演習を、早い時期に行うことが有効な教授方法として示唆された。

以上より、成人看護学での看護過程演習における患者シミュレータを用いたシナリオシミュレーション演習は、講義と実習をつなぐ有用な教授方法であると考えられる。

本研究の限界

本研究の結果から、講義と実習をつなぐ看護過程演習の教授方法への示唆を得ることはできたが、研究協力を得られた学生のみを対象としたため、意見の偏りがある可能性があり学生の学びをすべて反映しているとは言えない。

結論

本研究は3年次生看護学生を対象に、科目「成人看護学Ⅱ」の看護過程演習における患者シミュレータを用いたシナリオシミュレーション演習での学生の学習経験を明らかにし、教授方法への示唆を得ることを目的とした。

学生は、看護過程の紙上事例を患者シミュレータで観察することで、視覚的イメージ化がなされ事例と患者シミュレータのつながりや、看護計画と実際の観察項目とのつながりを捉え、訪室前の情報と観察した情報からアセスメントする重要性の理解に至っていた。また、観察の根拠となる知識・技術や、状態変化の予測とその対応の準備が必要なことを実感し、確かな実践力の必要性を理解していた。さらに、患者に不安を与えない対応の必要性や、制限時間・手技・異常時の指示に気を取られ、患者やペアの学生とのコミュニケーションや配慮が不足していたことを学んでいた。加えて、ペアでの実施や他のペアの実施とデブリーフィングの繰り返しを通して情報共有や連携の必要性を見出していた。これらの学習経験は、知識・技術・態度を統合する学びであり、成人看護学での看護過程事例と患者シミュレータを組み

合わせたシナリオシミュレーション演習は、臨地実習の前段階として有用な教授方法であることが示唆された。

謝辞

本研究にご協力いただきました研究参加者の皆様に感謝申し上げます。本研究は日本看護研究学会第44回学術集会での発表内容に一部修正を加えたものである。

利益相反

利益相反に相当する事項はない。

引用文献

- 1) 看護基礎教育の充実に関する検討会:看護基礎教育の充実に関する検討会報告書, 厚生労働省, 2007.
- 2) 看護教育の内容と方法に関する検討会:看護教育の内容と方法に関する検討会報告書, 厚生労働省, 2011.
- 3) 阿部幸恵:看護教育で有効なシミュレーション教育とは, 看護教育, 50 (9), 798-801, 2009.
- 4) 深澤佳代子:看護基礎教育を巡る課題とシミュレーション教育, 医療機器学, 81 (3), 197-200, 2011.
- 5) 小西美和子:学生の学びをつないでいくためのシミュレーション教育の位置づけ, 看護教育, 54 (5), 354-360, 2013.
- 6) 大川宣容:高知女子大学での取り組み 急性期看護援助論における手術直後シミュレーション学習, 看護教育, 50 (9), 806-810, 2009.
- 7) 矢野朋実:手術直後の患者の観察演習における学生の傾向と演習方法の検討, 南九州看護研究誌, 9 (1), 47-54, 2011.
- 8) 小西美和子:看護基礎教育における卒業前学生を対象としたフルスケールシミュレーション学習プログラムの開発, 近大姫路大学看護学部紀要, 5, 41-48, 2013.
- 9) 神田知咲:基礎看護教育初年次におけるフルスケールシミュレーション学習の検討, 近大姫路大

学看護学部紀要, 5, 49-55, 2013.

- 10) 阿部幸恵：看護基礎教育におけるシミュレーション教育の導入 基本的な考え方と事例, 15, 日本看護協会出版, 東京, 2018.
- 11) 阿部幸恵：臨床実践家を育てる！看護のためのシミュレーション教育, 56-57, 医学書院, 東京, 2013.
- 12) 黒田暢子, 織井優貴子：看護基礎教育におけるシミュレータを用いたシミュレーション教育の実態調査, 日本シミュレーション医療教育学会雑誌, 4, 22-28, 2016.